

# 第3期東北学院大学外部評価を受けて

～第3期の所見と第4期への展望と課題～

2019(平成31)年3月





## 目 次

2016-2018 第3期外部評価を受けて.....	1
第3期外部評価概要 .....	2
第3期外部評価委員会委員 名簿.....	3
第3期外部評価項目 .....	4
2016(平成28)年度.....	4
2017(平成29)年度.....	5
2018(平成30)年度.....	6
第3期外部評価に対する外部評価委員会からの所見 .....	7
第4期外部評価委員会への引継ぎ事項 .....	12
第3期外部評価委員会からの所見と第4期への引継ぎを受けて .....	14

## 2016-2018 第3期外部評価を受けて

学長 松本 宣郎

2010（平成20）年度から、正式の規程に則っての外部評価を始めて、今期で第3期の区切りを迎えた。毎年の報告書をひもとくと、第1期のそれには若干の形式主義、抽象的評価、が見えなくはない。それが年を追うごとに課題が明確になり、評価の言葉も具体的かつ、より辛辣さ（？）を増してきた、つまりは評価の精度と密度が高まってきていることに気づく。私立大学の自発的評価として、誇るに足るものだ、と敢えて胸を張る思いである。のべ20名を超える評価委員の方々の、貴重な時間を割いてのご協力とご尽力に厚く感謝するものである。

第3期外部評価委員会には、第2期の評価結果を直接受けてその課題を具体的に追求していただいた。2016(平成28)年度には第2期評価委員会の指摘に応じての大学の対応について調査いただき、ヒアリングなどもしていただいた。2017(平成29)年度には同年度受審した大学基準協会による認証評価のための報告書のうち「内部質保証」についてご質問いただき、ヒアリングも実施した。そして2018(平成30)年度には前年度調査の内部質保証のための本学の対策に一定の評価をいただいた上で、本学の教育が学生の要請に応じているかを学生への直接インタビューによって調査したいと委員会の申し出を実施した。

以上のような経緯を経て今回まとめのご報告をいただいて第3期外部評価委員会としての勤めを終了いただいた。各委員にはこの間のお働きに重ねて感謝申し上げる。委員によっては2期6年間おつとめいただいたことになる。それぞれに多忙な公務をお持ちの方々であり、その合間を縫ってのご協力にはただ恐縮するほかはない。

評価委員会のご指摘に応じて対策を施すことにより本学の教学に益するところは大であったが、この過程で各委員と私たちとが評価領域を越えて、多岐にわたって対話できたことも大きな収穫であった。大学の外から見ての気づきに、なんども「目からうろこの落ちる」体験をさせていただいたのである。

最終年度にいただいた今後の課題、ことにある学生はより高度な内容の授業を求め、他方授業について行けない学生がいる、という問題などに私たちは重点的に取り組む所存である。

本学の評価遂行の体制がこの9年間、着々と整ってきたことも学長として喜びに堪えない。当初は学務担当副学長を実務上の責任者に学長室のスタッフがサポートしてきたのであるが、3年前、学長室にIR課を設けてデータ収集力と企画力を強化し、2017(平成29)年度からは副学長を増員して1名を点検・評価担当として責任者とした。効率化と迅速化が実現した。これらのことにより、今後も東北学院大学は、公的評価を受け入れ、それにより教学の改革を積極的に推進する大学として歩んでいきたい。

## 第3期外部評価概要

平成28年7月21日外部評価委員会

### 1. 東北学院大学の外部評価について

本学は、学校教育法に基づく自己点検・評価及び認証評価に加えて、第三者による教育・研究活動の評価を受けることにより、教育・研究水準の向上と組織の活性化を図ることを目的として、平成20年4月に「東北学院大学外部評価委員会規程」を制定しました。

これまで、第1期（平成22～24年度）及び第2期（平成25～27年度）の外部評価委員会を設置し、毎年外部評価を実施してきました。

このたび、第2期外部評価委員会の任期満了に伴い、平成28年4月に第3期外部評価委員会が発足しました。

### 2. 第3期外部評価について

#### (1) 第2期外部評価委員会からの引き継ぎ事項

平成24年度の外部評価委員会では、第2期の外部評価について大学と協議を行い、以下の事項を確認し、平成25年4月18日（木）に開催した点検・評価委員会で、これらを念頭に置いた外部評価の実施を承認しました。

- ①自己点検・評価や認証評価との差別化を図る。  
...評価対象・時期等の重複の回避、大学内部のPDCAサイクルの循環の促進
- ②評価に係る双方の負担を軽減する。  
...評価資料そのものや教職員の負担の削減
- ③新たな評価手法として、在学生や卒業生などへのインタビューなどを検討する。  
...大学自己点検・評価の項目にはないステークホルダーからの生の意見聴取

また、平成27年度の外部評価委員会では、第3期の外部評価について、第2期で実施したインタビュー調査の継続を求める意見があった一方で、これまで実施した外部評価で指摘された事項についての改善状況を明確に示して欲しいという意見が出されました。

#### (2) 第3期外部評価の概要（点検・評価委員会提案）

- ①評価年度：平成28～30年度
- ②調査対象：点検・評価報告書及び過年度に外部評価で指摘された事項への対応状況
- ③評価方法：報告書及び対応状況をまとめた資料を基に大学に対する指摘、助言等を行う。また、必要に応じて学内関係者等にヒアリングを行うことがある。
- ④評価項目：大学の改善に向けた実施状況及び体制等

## 第3期外部評価委員会委員 名簿

任期：2016(平成28)年4月1日～2019(平成31)年3月31日

No.		職名	氏名	委員会規程	
1	委員長	東北大学 高度教養教育・学生支援機構 特任教授	関内 隆	第5条第2項第1号	大学等の教育機関の教員
2	副委員長	公益財団法人 せんだい男女共同参画財団 理事長	木須 八重子	第5条第2項第3号	本学の所在する地域の関係者
3	委員	尚綱学院大学 学長	合田 隆史	第5条第2項第1号	大学等の教育機関の教員
4	委員	宮城学院女子大学 現代ビジネス学部長	宮原 育子	第5条第2項第1号	大学等の教育機関の教員
5	委員	株式会社清月記 代表取締役社長	菅原 裕典	第5条第2項第2号	経済界の関係者
6	委員	株式会社河北新報社 社長室長	八浪 英明	第5条第2項第2号	経済界の関係者
7	委員	宮城県教育委員会教育長	高橋 仁	第5条第2項第3号	本学の所在する地域の関係者

### 第3期外部評価項目

#### 2016(平成28)年度

第2期外部評価委員会からの引き継ぎ事項は、①第2期で実施したステークホルダーへのインタビュー調査の継続実施、②これまでに実施された外部評価において指摘された事項に対する大学側の対応状況の確認を大学側の対応状況を記した資料及び大学執行部および学部長へのヒアリングに基づき、評価が実施された。

#### 平成28年度外部評価活動スケジュールの概要

日 付	活動内容
2016(平成28)年7月21日(木)	第1回外部評価委員会開催
2016(平成28)年8月25日(木) ～9月9日(金)	過年度外部評価における指摘事項等について、対応状況を確認する事項の選択
2016(平成28)年10月31日(月) ～11月11日(金)	大学側担当者による評価資料(「過年度指摘事項への対応状況記入シート」)の作成・提出
2016(平成28)年12月3日(土)	評価資料(「対応状況記入シート」をとりまとめた「対応状況報告書」)の各委員への送付
2016(平成28)年12月9日(金)	平成28年度第2回外部評価委員会開催 評価資料及び大学側の説明の内容に対するヒアリングの実施
2016(平成28)年12月21日(木) ～2017年(平成29)年1月18日(水)	評価資料及びヒアリング結果に基づき委員各自で「所見記入シート」を作成
2017(平成29)年1月～3月上旬	『平成28年度東北学院大学外部評価報告書』編集
2017(平成29)年3月13日(月)	第3回外部評価委員会開催 『平成28年度東北学院大学外部評価報告書』を大学に提出

## 2017(平成 29)年度

2017（平成 29）年度においては、本学が 2017（平成 29）年度大学基準協会の大学評価の受審に際して作成をした『点検・評価報告書』のうち第 10 章の「内部質保証」に関する事項について「大学全体レベル」、「学部レベル」、「個々の教員レベル」、「IR」の観点から外部評価を実施した。

2018（平成 30）年度からの第 3 期認証評価期間は、内部質保証が重点化され、大学基準協会による点検・評価項目は大学基準 2 として重点化されるため、本学では個々の教員レベル、学部・研究科レベル、大学全体のレベルにおいて教育・研究それぞれの面に、現在の課題・目標、進捗状況等を示し自己点検・評価課程の見える化を評価することを目的とした。

### 平成 29 年度外部評価活動スケジュールの概要

日 付	活動内容
2017（平成 29）年 7 月 26 日（水）	第 1 回外部評価委員会開催
2017（平成 29）年 10 月 13 日（金）	外部評価委員による『2017 年度大学評価申請点検・評価報告書』第 10 章内部質保証を中心とした質問事項の提出
2017（平成 29）年 11 月 20 日（月）	大学側担当者による回答作成・提出
2017（平成 29）年 11 月 30 日（木）	平成 29 年度第 2 回外部評価委員会開催 学長・副学長・学部長・研究科長へのヒアリングの実施
2017（平成 29）年 12 月 21 日（木） ～2018（平成 30）年 1 月 15 日（月）	第 2 回外部評価委員会でのヒアリング結果に基づき、委員各自で「大学全体レベル」「学部レベル」「個々の教員レベル」「IR」4つのカテゴリーについての講評および総評の作成
2018（平成 30）年 1 月 15 日～3月上旬	各委員からの講評および総評に基づき委員長による総評作成
2018（平成 30）年 3 月	『平成 29 年度東北学院大学外部評価報告書』編集
2018（平成 30）年 3 月 23 日（金）	第 3 回外部評価委員会開催 『平成 29 年度東北学院大学外部評価報告書』を大学に提出



## 2018(平成 30)年度

2018（平成 30）年度は、教育・研究・社会貢献等の質保証及び質の向上に向けた具体策が着実に実施され、専門教育を土台にグローバルな視点を備えた教養ある人材、地域の政治・経済・文化などの担い手となる人材を輩出し続けることに期待する。そして、構想中のキャンパス整備計画を推進する中で地元密着型の地域貢献と、周辺地域一帯のまちづくりに貢献する大規模大学として、細部にわたるまで「血の通った運営」を行い、大学のブランド力を向上させ東北地方の発展に尽くす地元の大学としての役割を確認する。

そこで 2018(平成 30)年度の外部評価では、本学の教育が在学生や社会からの要請に応えられているかについて学部学生を各学年・学科から均等に 61 名抽出し、「学生インタビュー調査」を実施した。

この、インタビュー調査をもとに本学の教学上の 3 つの方針及び教育の理念・目的の適切性について外部評価を行い、大学の活性化及び取り組みの継続的改善に資する提言を受けた。

### 2018（平成 30）年度外部評価活動スケジュールの概要

日 付	活動内容
2018(平成 30)年 6 月 21 日（木）	第 1 回外部評価委員会開催
2018(平成 30)年 10 月 31 日（水）～ 2018(平成 30)年 11 月 8 日（木）	学生への事前アンケートを「基本情報・学習活動」、「大学生活」、「課外活動」の 3 項目について実施
2018(平成 30)年 11 月 19 日（月）	学生への事前アンケート集計結果の送付及び学生インタビュー当日質問提出依頼
2018(平成 30)年 11 月 29 日（木）	第 2 回外部評価委員会開催 学生インタビュー実施
2019(平成 31)年 1 月 11 日（月）	第 2 回外部評価委員会を受けての「学生インタビュー調査に係る報告書」及び「第 3 期東北学院大学外部評価に対する所感」、「第 4 期東北学院大学外部評価に対する引き継ぎ事項」を各委員より提出
2019(平成 31)年 1 月～2 月中旬	各委員からの講評及び総評に基づき委員長による総評作成
2019(平成 31)年 2 月～3 月	『2018（平成 30）年度東北学院大学外部評価報告書』編集
2019(平成 31)年 3 月 8 日（金）	第 3 回外部評価委員会開催 『2018（平成 30）年度東北学院大学外部評価報告書』を大学に提出

### 第3期外部評価に対する外部評価委員会からの所見

関内 隆 委員長

平成28年度には、第2期までの外部評価で指摘された事項に関する対応状況・大学側の改善の取組みについて検討した。中長期的な計画「TG Grand Vision 150」のもとで大学運営を推進しつつ、東日本大震災からの復興に関するボランティア活動等の全国ネットワーク中軸としての役割を果たすなど、社会にアピールするなかで大学としてのプレゼンスを高めていることに印象深い思いを抱いた。なお、広報戦略に関するターゲットの絞り方や情報発信に関するスピード感に課題があることについては、今後の取組みに期待したい。

教育活動の面では6学部が特性に応じた実に多彩な活動を展開していることが高く評価される。それを土台に初年次教育とキャリア教育を結び付け、入学直後から学生のキャリア形成意識を育むよう更なる改善に期待したい。また、学生支援では卒業生との交流の場の拡大や留学支援等のグローバル化対応など今後の更なる展開を願っている。

平成29年度は認証評価受審の時期に当たり、大学が作成した『点検・評価報告書』第10章「内部質保証」に絞って外部評価を行った。「大学全体レベル」では、学外からの意見を積極的に取り入れ、中長期の明確な目標設定のもとで、複線的・重層的に点検・評価を進めるための内部質保証システムの体制自体は出来上がっており、今後は教育・研究・社会貢献等の質保証および質の向上に向けた具体策の着実な遂行に期待したい。

「学部・研究科レベル」においては、授業改善アンケートや卒業時意識調査に加え、学部独自の特色ある取組みも行われており、これらの成果を大学全体として共有化するためのFD活動を推進することが期待される。大学教育の土台となる「教員個人レベル」に関して『教員業務・活動報告書』に教育の質向上に関する記載項目を設定する計画はたいへん意義深い取組みである。「IR活動」については、事前にデータ収集の目的を明確化し、IR委員会のもとでデータ収集・分析作業を各学部・研究科と連携を深めつつ実施することを期待している。

平成30年度には、大学の教育や学生支援に関する在学生の生の声を聴くために6学部の1～4年次学生61名を対象にインタビュー調査を行った。今年度の実施成果にまとめたとおり、「manaba」システムを活用して、学生との活発な意見交換をすることができ、3年間の外部評価活動を締めくくるにふさわしい取り組みであった。

貴学がこれからも建学の精神に基づいて、学生中心主義をベースに地域と社会に貢献する大学像を掲げ、地域の政治・経済・文化の担い手となる人材を輩出されることを期待している。「東北における私学の雄」としての評価に甘んずることなく、より高みを目指すことで、教養教育をベースにした特色ある総合大学としての評価がますます高まることを願っている。

木須 八重子 副委員長

東北学院大学第3期外部評価委員として、貴大学における、教育・研究水準の向上、組織活性化のための詳細な取り組みを知る機会を得たことに感謝する。外部評価委員としては大学と一番遠い立場からのかかわりであったが、組織運営や地域貢献、何よりも人を育てるという共通の視点から、課題をとらえ所感を述べさせていただいた。

貴大学の明確なビジョンの下、推進する仕組みは十分に構築されていると考える。関係する組織の複雑さはあるものの、それぞれが相互にしっかりと機能することで、教育水準の向上や大学運営の安定化は保持されており、関係者のたゆまぬ尽力を理解することができた。今後は推進を図る総括部門から教育現場の最前線まで、そこにかかわる全教職員の理解や意思のさらなる浸透を図り、恒常的な改革への歩みが進むことを期待する。

東日本大震災の被災地であることで体験せざるを得なかった困難を力に変えて、震災の伝承やボランティアや社会貢献という学びや実践を積み重ねていることは、ここでしか得られない貴重なリソースとなっており、東北学院大学の大きな特色として続く世代の学びにつなげていかれることを切望する。

今期は、学生との対話という貴重な機会を得たが、こうした環境で学べる彼ら彼女らを「幸福」だと思う。この「幸福」を理解するのはずっと後のことになるかもしれないが、ここで得た学びや体験を、社会の中に活かして欲しいと願う。

学生の学力差について、今回、注視することとなったが、教員の方々には、教育や学びに関しては妥協をしないで欲しいと考える。一方で、社会人力はある程度身に付けて社会に送り出して欲しい。この点に関しては、企業でいえばOJTのように学生生活のあらゆる場面でも学ぶものとするが、もともと大学にあるキャリア支援の仕組みを活かし、キャリア教育の拡充を図ってはどうか。

キャンパスの移転計画もあり、仙台市の地域政策における東北学院大学の存在感も一層増すと思われる。大学が地域の誇りとなる、それも夢ではないと期待する。

合田 隆史 委員

大変有意義な取り組みであり、私個人としても勉強になった。大学改革に真摯に取り組まれており、その成果が学生に還元されていることが感じられた。今後とも継続して取り組まれることを期待する。

#### 宮原 育子 委員

初めて東北学院大学の外部評価委員に就任しての3年間は、委員自らが動く機会が多く、大学の運営を一緒に考えさせていただく貴重な機会となった。

特に、内部質保証システムについては、大規模な大学の組織の中で、この外部評価委員会も含め、大学全体、学部レベル、教員レベルで点検、評価が丁寧に行われており、大学の様々なレベルで同じ方向を向いて、教育運営が行われていることが確認できた。

また、大学の建学の精神と歴史を大切にし、自校史の書籍の出版や、東日本大震災後から続けている様々なシンポジウムや支援活動、『震災学』の出版等、大学自身が社会に問いかけるテーマを持ち、その発信もしっかり行っている。

今年度は、学生たちへのアンケートやインタビューを通じて、東北学院大学生の生の姿に接することができ、大学での講義に期待する学生の考えや大学生活への課題も知ることができた。

私自身も大学人として、東北学院大学の運営への真剣な取組は大変参考になった。松本学長のリーダーシップのもと、各担当の副学長、各学部長がタッグを組み、様々な情報収集と評価・検証が行われていることは、東北学院が今後も前進するためのエンジンになっていることを実感できた。

また、外部評価委員会の事務局の皆様には大変お世話になった。ここに記してお礼申し上げます。

#### 菅原 裕典 委員

第二期に続き、第三期も参加したが、外部評価委員会委員長のリーダーシップのもと、素晴らしい外部評価の役割を果たすことが出来たと思っている。

大学側の取り組みが前回よりも前進していると感じた。学生の為に精一杯の改善に取り組む姿勢を強く感じた次第である。

ただ、まだまだ改善することは山積みと思われる。是非、妥協せず取り組んで頂きたい。

八浪 英明 委員

3年間の外部評価委員の活動を通じて、東北学院大学の教育や活動の理念・方針、また現状と課題などについて包括的に知る機会を得た。東北の企業などに数多くの卒業生を送り込んでいる大学として、その特徴・カラーは良くも悪くも「東北」そのものと言える。良く言えば「まじめ」で「粘り強い」、ネガティブな表現をすれば「おとなしく」「アピール度が弱い」、あるいは「融通がきかない」「スピード感が足りない」ということになるだろうか。学生インタビューを通じ、本学の学生は、首都圏の大学や学生に対し、コンプレックスや焦りに似た感情を少なからず抱いていることも分かった。ただ、「のんびり」「おおらか」といった気質は、裏返せば、首都圏の学生には見られない東北ならではの持ち味とも言える。こうした特徴は特徴として認め、いたずらに卑下することなく、改善点のみをただしていくのが、本学の進むべき道であると考えます。

個別にはボランティア活動に力を入れ、社会との接点を積極的に意義付けている点は高く評価したい。これは地域に多くの卒業生を送り出している大学としての責務でもあり、コミュニケーション力向上を目指す学生にとっても、大変大きな教育効果をもたらしていると考えます。一方、最も基本となるはずの学習面では課題が見つかっている。優秀な学生の獲得や就職率向上など、大学として掲げる目標を達成するためには、今力をいれるべきは個々の学力向上や学ぶ環境の整備など、最も基本的な事柄なのかもしれない。

学生インタビューで、学生間の意識格差の存在や、授業のレベルの低さを嘆く学生が相当数いることに驚かされた。附属中高からの入学は大学の大事なカラーであり、マンモス校を今さら変えろというのも無理な話だが、「もっと学びたい」という前向きな学生の意欲に応える大学でなければ、そもそも大学の意味がない。学生の学ぶ意欲を真正面から受け止められる教員の資質向上、講義の在り方の再点検が急がれると思う。同時に、講義についていけない学生対策も真剣に始めるべきである。国立情報学研究所の新井紀子教授の指摘を待つまでもなく、勉学に意欲を持ってない学生の「つまづき」は中学あたりから始まっているケースが多く、教科書を読みこなす「読解力」向上を学校法人全体が貫く目標としてはいかがか。

高橋 仁 委員

少子化が進む現在、選ばれる大学となっていくためには学生の確保という「入口」と有意な人材の輩出という「出口」の両面で成果を示していくことが重要であり、中でも、学生の確保は至上命題となっている。今期の外部評価においても、本学が「質保証」を旗印にして大学の魅力向上に努力されていることについて、多角的に把握し検証することができたものとする。

大学の「質保証」は、何と言っても「講義の質保証」が第一である。今年3月に本学から刊行された「授業改善のための学生アンケート結果報告書」の「刊行にあたって」にも示されているように、「学生による授業の満足度を上げることが大学の生き残りに直結」しており、「もはや研究の片手間に授業を行う時代ではないことは周知のこと」ではあるが、これを改善していくことは、どの大学でも、また大学に限らずどの学校でも困難を感じているところであろう。

今回、外部評価委員会では、「授業改善のための学生アンケート」とは別に、61名の学生へのインタビュー調査を実施した。その結果では、依然として講義の「質」に対する学生の不満等の意見が散見された一方で、講義により自らの学ぼうとする意欲がさらに向上したという趣旨の回答もあり、「講義の質保証」が前進しつつあるということが感じられる結果となった。

授業改善は、それを担当する教員の意識改革なしには不可能である。今期の外部評価が、本学の「質保証」を実現するために、教職員の意識改革と授業改善への一助となることを心から願うものである。

授業の質を高めていくことと併せて、いわゆる「出口政策」も重要である。入社後の教育に十分な時間と経費を割く時代ではなくなっている中、学生には、卒業後直ちに一人前の社会人として通用するだけの「教養」と「常識」を身につけておくことが求められる。この点に関して、学生へのインタビューの中でも進路相談等への意見が示されており、大学としてさらに改善を要する部分があるものと思われる。

今回、外部評価委員を務め、大学がさらなる充実に向けて、さまざまな改革への取組に挑戦し続けていることがよく理解できた。私自身としても学ぶところが多く感謝する次第である。東北学院大学が、社会の期待に応えるべくなお一層発展することを期待している。

## 第4期外部評価委員会への引継ぎ事項

関内 隆 委員長

平成30年度に学生インタビューで行った事前アンケートと manaba システムによる対面インタビューの方式は、学生生活の生き生きとした実態、大学への率直な要望・意見、大学の今後の姿への思いを把握する機会となって大変効果的であった。在学生からの意見聴取の際には、今後の外部評価においてもこうした方式を活用されることが望まれる。

なお、在学生に加えて卒業生や就職先関係者からの意見聴取について、次期の外部評価においてぜひ実施されることを願っている。

木須 八重子 副委員長

大学内部の PDCA サイクルの中での点検事項の検証と改善については引き続き必要と考える。ある意味「主役」である在学生の声を聴く機会も引き続き設けた方がよいと考える。東北学院大学の特色である、TG ベーシックや英語教育についての現状と評価の実施。

合田 隆史 委員

具体的な実施方法については改良の余地があるとしても、基本的に従来の方式で継続されると、経年での変化が見える可能性がある。少なくとも学生インタビューについては、参加した学生も多くが意味を見出しているようであるので、継続した方がいいと考える。

宮原 育子 委員

今期の学生アンケートやインタビューの結果、学生に対する窓口対応に課題を感じている意見が目立った。この問題はどの大学でも存在するが、今後、東北学院大学で過ごす学生たちの満足度を上げていくためには、一度この課題を考える必要があると感じられたので、可能であれば、学生窓口の対応の実態や、事務部の方々のご意見などを伺いながら、改善を考えていく機会を持つことも良いのではないかと考えた。

菅原 裕典 委員

特にないが、今までの内容を理解したうえで、新たな評価内容に取り組んでいただければより効果が大きいと感じる。

八浪 英明 委員

中学・高校・大学の一貫教育の現状と課題。「受験のない」生徒たちの学力、モチベーションと「受験を経て入学した」学生との意識の差異が実際にあるのか、ないのか。課題があるとすれば、どのように解決すべきか。

講義についていけない、勉学に意欲的でないと思われる学生の底上げ対策。特に「読解力向上」(＝文学への理解はこの際除く。説明的文章や教科書、問題文自体を正しく読みとける力)に向けた全学的取り組み。これは特に工学部など、理系学部も巻き込んだ取り組みがほしい。貴大学の卒業生を受け入れている企業の実感としては、工学部から弊社技術部門に入社した実在者の例として、一般的なレベルとして優秀・有能と言えるのにもかかわらず(職務遂行に必要な知識・技能や職場統率力については申し分なし)、報告書作成やプレゼン、会議での「言語力」に課題があるケースがいくつかあったことから。さらに言えば「スマホ世代」にとって、読解力向上は喫緊の課題であり、近い将来、AIに仕事を奪われない学生を育てるうえでも必須の課題である。新聞は力になれると思う。



### 第3期外部評価評価を振り返って

副学長（点検・評価担当） 原田善教

本学には本学の様々な取り組みに対して外部から意見を聴取する機会をいくつか持っている。それには学校教育法に定められた認証評価機関としての大学基準協会と本学独自の取り組みである外部評価委員会がある。他には、教学に関する懇話会、西南学院大学との相互評価もある。

外部評価委員会による外部評価は2018年度で3期9年を終え、これまで様々な視点から本学の取り組みを評価してきた。ここでは第3期の外部評価を受けて第4期に向けて、これまでのまとめとこれからについて述べる。

いつもそうであるが、評価を受ける際には緊張し様々な取り組みの一つ一つに細心の注意を払いながら説明をするものの、評価後には一段落してその際に指摘されたことについてはやや忘れがちになることも多い。その意味で、第3期の初年度（2016年度）に第1期及び第2期の指摘事項について振り返りを行ったことは有意義であった。その多くは改善が進んでいるとの評価を受けたが一部未だ不十分なこともあったので、さらなる改善に努めたい。2017年度は大学基準協会による認証評価受審のために作成した『点検・評価報告書』第10章「内部質保証」について詳細な検討が行われた。より掘り下げた検討が行われたことから実際の大学基準協会の実地調査よりも厳しかったように思われたものの、仕組みの構築と機能態様についての正確な理解を進めることができたと思われる。今後はいかに機能させ十分な成果を得られるかに努力したい。2018年度は、現役の学生から話を聞く機会を設けた。事前アンケート、リアルタイムのアンケートに学生は真摯に対応しそこから学生の考えや感じ方について新たに把握できたことは意味のあることであった。文明の利器として「respon」を使った意見収集の方法は画期的であり、そこで示された貴重な学生の意見を真摯に受け止め改善に努める覚悟をしたところである。

総じて第3期の3年間においてもそれまでと同様に、外部評価委員会からはたくさんの改革のための意見を頂いており、それに基づいて改善に向けた様々な取り組みを具体的に進めていくことにしている。

2019年度からの第4期では、第3期の委員会からの引き継ぎ事項にもあったように、学生を含めた様々なステークホルダーからのアンケートやヒアリングを行うことを考えつつ、改善・改革に向けた取り組みを進めたいと考えている。とりわけ、指摘されている「学力差」問題、「キャリア教育の拡充」、「読解力向上」に向けた取り組みは急務である。

### **第3期外部評価を受けて**

発行日：2019（平成31）年3月8日発行

編集・発行：東北学院大学外部評価委員会

問合せ先：東北学院大学外部評価委員会事務局

（東北学院大学 学長室事務課/IR課）

〒980-8511 宮城県仙台市青葉区土樋一丁目3-1

TEL 022-264-6424 FAX 022-264-6364

E-Mail [ck@staff.tohoku-gakuin.ac.jp](mailto:ck@staff.tohoku-gakuin.ac.jp)